ことば コラム　～本でことばの成長をワンランクアップ！～

保護者の方からことばの学習に一生懸命取り組み、日常生活の中で少しずつ文字に親しむようになってきたとの声が増えています。本を読むことは、ことばの成長に大きな役割を果たしてくれます。特に、「絵本」から「幼年童話」への移行が重要な転換期となります。字が多く、挿絵が少なくなる童話の世界へスムーズに進むことは、子どもの「想像力」や「集中力」、「読解力」を大きく伸ばすチャンスです。今回は、ご家庭でできる絵本から幼年童話へ橋渡しするための効果的なサポート方法をお伝えします。

絵本から幼年童話へ移行して身に付く力とは?

想像力：絵本のように挿絵などですべての情景が描かれていないため、文章から登場人物の様子や気持ち、場面風景を「頭の中で思い描く」ことになります。「リンゴ」という言葉だけでも、「美味しそうなリンゴ」「かごに山盛りに入っているリンゴ」「毒リンゴ」などの中から文脈によって想像（思い描く）しなければいけない「リンゴ」は変わってきます。そして、ゆくゆくは他者の気持ちを想像する力にも繋がっていきます。

集中力：文字量が増え、話が長くなることで、物語の全体像を把握しながら読み進める「集中力」が養われます。また、シリーズものなどでは「前の話では〇〇だったのに、実は･･･」のように物事を関連付ける力も育むことができます。

読解力：多様な表現や言葉に触れることで、自然と語彙が増えます。これが今後、教科書や説明文を読む力(「読解力」)の土台となります。

家庭でできるスムーズな移行をするための３つのステップ

絵本の読み聞かせなどから文字が多い本へ移行する時期は、子どもにとっても保護者にとっても少し難しく感じられるものです。焦らず、段階を踏んでサポートしてあげましょう。

ステップ１：絵本と童話の「いいとこどり」をする

まずは、絵本と幼年童話の中間にあるような本を選び、抵抗感をなくすことから始めます。特に、以下のようなタイプを参考に本選びをしてみてください。

🎯 移行期におすすめの本のタイプ:（書籍例）

タイプ①「物語絵本」：
物語の進行を楽しんだり、内容や言葉づかいが少し難しかったりするもの。
○『おれたち、ともだち！』シリーズ
出版社：偕成社
○『あらしのよるに』シリーズ
出版社：講談社
○昔話（日本・海外）や戦争に関する絵本等

タイプ②「文字が大きく、挿絵が比較的多いもの」：
○『みどりいろのたね』シリーズ
出版社：福音館
○『どうわがいっぱい』シリーズ
出版社：講談社
○『はれときどきぶた』シリーズ
出版社：岩崎書店

タイプ③「テーマ性があるもの」：
子どもたちの好奇心をくすぐるような、身近な植物、動物、モノ、現象をテーマとしているもの。
○『かがくのとも』シリーズ　※月刊もしくは傑作版
出版社：福音館書店
○『幼年版シートンどうぶつ記』シリーズ
○『幼年版ファーブルこんちゅう記』シリーズ
出版社：あすなろ書房

タイプ④「達成感を味わえるもの」：
短いお話が複数入っているなど、一冊を複数回かけて読み切る達成感を味わうことができるもの。
○『ぼくは王さま』シリーズ
出版社：理論社
○『妖怪レストラン』シリーズ
出版社：童心社
○『モンスター・ホテル』シリーズ
出版社：小峰書店

ステップ２：親子の「読み聞かせ」を卒業しない

「もう自分で読めるから」と読み聞かせをやめてしまうのはもったいないことです。読み聞かせの方法を少し変えて続けましょう。

読み聞かせの工夫:

★「交 互 読 み」：保護者と一章ずつ、または交代で数ページずつ音読する。親の滑らかな音読を聞くことで、文字と音のリズムを結びつけられます。

★「役 割 読 み」：登場人物になりきって読むことで、文字だけでは伝わりにくい「感情」や「場面」のイメージを明確にしてあげます。

★「途中まで読み」：物語の面白い部分まで親が読み、続きは「さあ、ここからは自分で読んでみて」と、ワクワク感を残してバトンを渡します。

ステップ３：読んだ後のひと手間を加える

本を読み終わった後の会話が、理解を深め、次の読書への意欲を高めます。

おすすめの会話例　★「あなたが主人公だったら、どうしたかな？」
★「一番面白かった場面はどこだった？」
★「このお話の続きはどうなると思う?」

※注意点:：内容を理解しているか試すような「テスト形式」の質問は避けましょう。「楽しかったね」という共感を大切にしてください。（避けたい会話例：「このお話に出てきたネズミはなにを探してた?」「ネズミはどこに行きたかったの?」など）

今回のコラムはいかがでしたか。是非お子さんと読書を楽しんでみてください。